

研究論文

非言語コミュニケーションとしての「ケータイのディスプレイを見る」行為

‘Looking at “Keitai” (Mobile Phone) Displays’ as a Form of Non-Verbal Communication

中村 隆志 Takashi NAKAMURA

新潟大学人文学部

Faculty of Humanities, Niigata University

要 旨

本研究は「ケータイのディスプレイを見る」という日常の当たり前となった行為に注目し、その使用場面と役割について考察する。ケータイは、外出先に携帯して行く通信機という役割と同時に、個人専用の通信回線という役割を併せ持つことから、家庭内を含め、多くの場所で使用されている。人々は様々な場面において、着信がないにも関わらず、自発的にふとケータイのディスプレイを見たくなる場合がある。この行為を理解するため、大学生に2つのアンケート調査を行った。1つめはディスプレイを見たくなる場面を自由記述で、もう一つはいくつかの場面ごとに使用したくなる欲求の強さを量的に回答してもらった。前者のアンケートからは、多くの場面で様々な使用法がされていること、使用者は自らの心証や態度をケータイを通してアピールする場合があること、後者からは、使用者は居合わせた他人との距離・視線・性差などの要因に影響されてケータイを使用していることが示唆された。これらの結果は、現実空間において「ケータイのディスプレイを見る」という行為が、新しい非言語コミュニケーションとして浸透してきていることを推察させるものである。

Abstract

This study considers ‘looking at “keitai” (mobile phone) displays’, a behavior that has become commonplace. “Keitai” are used not only as portable communication devices that can be taken outside, but also as private communication lines. For this reason, “keitai” are used in various places such the home where traditional communication lines might be available. In many situations, people may spontaneously want to look at their “keitai” displays even when they are not expecting a call. To understand this behavior, I administered two questionnaires to university and graduate school students. Respondents answered with free descriptions in the first questionnaire and with quantitative answers in the second questionnaire. The result of the first questionnaire suggests that people use their “keitai” in a variety of ways in many different situations and non-verbally express their feelings and attitudes through their behavior of looking at “keitai” displays. The result of the second questionnaire suggests that “keitai” usage depends on situational factors such as physical distance from others, line of sight of others and the user’s gender. From these results, it can be surmised that looking at “keitai” displays is spreading as a new form of non-verbal communication.

1. はじめに

2007年1月において、国内における携帯電話・PHS（以降、まとめてケータイと呼称する）の契約数は1億件を超えている^[1]。第3世代携帯電話の契約数は全体の過半数となり、音声端末としてだけでなく、情報端末としての機能が拡大している。オーディオプレイヤーとしての機能を備えたり、ICカードやGPSなどを用いた様々なサービスが展開されている。提供される端末のデザインは多様化し、カラーリングや質感などで差別化がはかられている。所有者側も様々なカスタマイズを施し、オリジナリティをアピールできるようになってきている。既に、ケータイを持つこと自体は当たり前の中的日常の中に組み込まれている。

岡田は90年代半ば以降のケータイをめぐる現象は「若者の問題」として語られてきた、とする^[2]。マナーの問題、モラルの問題、人間関係の変容などが主な論点となり、ケータイは若者のメディアと見なされ、批判、憂慮の対象として取り扱われることが多かった。電車内における「不関与の規範」を乱したり、会ったこともない者と匿名の人間関係を構築したり、限

られた親しい仲間との選択的人間関係に没頭したりするケータイ使用者達は、目の前に居る人間に徹底的に無関心であると映るため、目の前にいながらコミュニケーションの糸口が乏しいことが懸念の対象であった。これらの言説は、新しいメディアをもつ一部の者の「奇行」が目立つ時代のものであった。伝統的な人間関係が喪失することを憂慮する多数派に支持されていたと言えるだろう。

新たな問題行動（歩道での歩行中のメール^[1]使用やイベント会場におけるディスプレイ画面使用による光の攪乱など）が指摘され続けている^[3]ものの、公共空間において、ケータイを使用する行為自体は奇行ではなく、今や当たり前の日常的行為である。ケータイ使用者の多くが過去にマナー違反とされる行動を目の当たりにし、自ら不快感を覚え、それらの行動を批判する映像や言説に触れた経験を持っているだろう。ケータイを使用する様子は目前の人間とのコミュニケーションに対して閉鎖的な印象を与える（例えば^[4]）と言われているが、ケータイ所有者も、他人がケータイを使用する行動を観察して、同じような印象をもった経験をしているだろう。しかし、国内のケータイの契約者数が増え続けて1億件を突破したことは、

ケータイそのものの使用を止めるどころか、ますます利用頻度が上がっていることを伺わせる。

ケータイは目の前の現実空間ではない仮想空間とのコミュニケーションを可能にするが、彼らの身体は現実世界にあり、ケータイは現実空間にある身体によって操作される。ケータイ使用者は、自らの経験に照らして、ケータイを操作する行為がその場に居合わせる人にどのような印象を与えるか、ある程度見当がついていて、それでいてなお使用しているのではないだろうか。とりわけ、「ケータイのディスプレイを見る」という行為は、一部の例外を除き、通話と比べてマナー違反として批判されにくいこともあり、極めて多くの場所で行われている。目立たないながらも、着実に広まっているこの身体的行為について、考察を進めていく。多くの人々が現実世界で居合わせる中、お互いがもう一つの世界とのインターフェースを携帯している。現在、このことを前提としてコミュニケーションを行う行動様式と文化が刻々と構築されているのではないだろうか。本研究は、それらの行動様式の変化を捉えるための端緒となる視点を提供するものである。

2. ケータイを使用する場所

モバイル社会白書 2005^[5]の調査結果によると、通話する場所、メール⁽¹⁾をする場所として最も頻度が高いのは、「自宅」や「街中」であり、ついで「会社・学校」、「食事・買物時」となっている（「食事・買物時」については、「食事・買物ができる場所」を意味すると解釈できる）。コンテンツ⁽²⁾を利用する場所として頻度が高いのは、やや異なり、「自宅」「電車」「街中」「会社・学校」となっている。上記調査で注目すべきは、ケータイが最も使用されるのが「自宅」である点である。この特徴について、自宅外でも携帯できるというケータイの長所を活用しているというよりも、一人一台保有する自分専用の通信回線である特徴が表れていると上掲書は分析している。また、電車内の使用頻度を通話、メール、コンテンツで比較すると、通話が最も低いことから、電車内でケータイを使用しながらも、通話としての使用を控える、というマナーが少しずつでも浸透しつつあることが推測される。

2.1 「自宅」、「会社・学校」

最も使用頻度が高い場所としての「自宅」についてであるが、同居人数、住まいの規模やレイアウト、友人知人の訪問頻度などによって、環境は大きく異なるだろう。ただし、ケータイの使用が問題になるのは、現実空間でのコミュニケーションが中断されかねない場面であり、つまりは家族や親しい友人知人との会食中や共に過ごす時間中である。2004年のiMiリサーチバンクの調査（「携帯電話は手放せない」近年の食卓）^[6]によると、中高生の子供をもつ母親723人に調査したところ、食卓中に携帯電話⁽³⁾を食卓に持ち込む者の割合は、母親が約50%、父親が51%、子が56%であった。さらに、携帯電話を食卓に持ち込む回答者のうち、母親で約68%、父親で66%、子で76%の者が、食卓中に手の届くところに携帯電話を置い

ていると回答している。また、携帯電話を食卓に持ち込む家族を対象に、食卓中に子どもがメールを読んだり、返信したりするとしかるかどうかを聞いたところ、47%がしからぬ、と回答している。つまり、この調査が行われた家庭の約半数が食卓に携帯電話を持ち込んでおり、その約半数が子供が食卓中にメールを読んだり返信したりすることを許容している。これらの家庭は2004年段階ではまだ少数ではあるものの、ケータイの普及以前と比較すれば、家族の食事風景は大きく変化していると言えるだろう。また、平岡善浩・馬立歳久の2005年の調査^[7]によれば、217世帯の大学生（18-21才）のうち、周りに家族が居るときでも携帯電話で通話する者の割合は32%であった。また、携帯電話でメールを見るが送信メールを作成しない者の割合が約6.6%、携帯電話でメールを見るし送信メールを作成するものの割合は約88%に上った（携帯電話でメールを見る者はトータルで約95%になる）。上記2つの調査は、対象年齢が異なり、また質問内容も異なるが、両調査の結果は、ケータイ普及後の家庭において、家族と共に過ごす時間でさえ、ケータイを手放さない生活スタイルが確実に広がっていることを示している。

見城はゴフマンの参与枠組の概念を用いて、親しい友人との会話中におけるケータイ通話を分析した^[8]。参与枠組とは、集まりの中でおこなわれるコミュニケーションの中での各メンバー同士がお互いに作り出す関係の総体であり、支配的コミュニケーションと従属的コミュニケーション（脇演技、交差演技、副演技）が多層的に重なって構成されるとする。見城は、打ち合わせ、会話を中断してしまうケータイの着信通話を、参加メンバー間の参与枠組への揺らぎと捉えた。また、通話者の会話中のやりとりや通話後のメンバー間のやりとりを分析し、参与枠組の揺らぎが従属的コミュニケーション手段を援用して如何に修復されていくのかを克明に解説している。

上記のモバイル社会白書2005の調査区分のうち、自宅以外で、親しい者と共に過ごす可能性が高い場所が、「会社・学校」である。所用を足したり、家族や友人と連絡をとったりする必要があるため、持ち込みを禁止している学校を除き、「会社・学校」でケータイを使用することは極めて日常的である。ただし、「自宅」と違って、親しくない者と顔を合わせる頻度も高いため、ケータイを使用する場面にも様々な状況が考えられる。

2.2 「電車」

「自宅」や「会社・学校」以外の場所として、ケータイを使用する頻度が高いのが、「街中」、「食事・買物時」、「電車」である^[5]。このうち、「電車」は通話での頻度は低いが、コンテンツ利用の頻度が高く、「街中」、「食事・買物時」と同じ公共的な場所でも、違う環境にあると考えられる。

電車の中でのマナーの問題は、「不関与の規範」の侵犯として語られる^[9]。たまたま電車に乗り合わせた乗客の間には、特に申し合わせることもないままに、お互いに関与しないことを相互に求め合う関係性が成立している。ところが、電車内でケータイで通話する者は、本人のプライベートなやりとりの一部を乗り合わせた乗客に一方的に聞かせることにより、通話者

のプライバシーの一端を不協和音として持ち込む。よって、ケータイ通話者は、電車内の「不関与の規範」を一方的に破る者として、マナー違反の対象となる。これらの分析は90年代に行われており、上記に述べた少数派の奇行に対する不快感の吐露に留まらない、理論武装を備えた批判としても有効な議論であったと推測される。

岡部・伊藤は、電車内での乗客達の非言語的行為の応酬を丹念に観察し、電車内やその他の公共空間を、マナー形成に向けての「ネゴシエーションの場」と捉えた^[10]。彼らは、電車内でのケータイ通話に対して、近接する乗客達が非言語的に鋭敏に反応する様子、通話者が周囲に対して顕示的に「他の乗客への配慮」を行う様子を分析している。電車内でのケータイ通話ではできるだけ控えるというマナーは定着しつつあるものの、通話せざるを得ない乗客が行う「他の乗客への配慮」を示す具体的行為とそれらを含む社会秩序は、状況や文脈に応じて、今後修整を続けながら変化して行くであろうことを指摘する。この分析の中で、彼らはゴフマンの「関与」および「関与シールド」の概念を用いて、ケータイ通話する者の非言語的行為を解釈した。彼らは、乗客達によって維持されている車内の秩序への個人々の取り組みを「関与」、個人々の私的行為（ここでは通話）が周囲に及ぼす影響を知覚的に遮蔽する物を「関与シールド」と捉えた。この「関与シールド」において重要な点は、使用者が周囲への影響を遮蔽しようとしている態度そのものが、顕示的であるという点である。すなわち、「関与シールド」使用者は、周囲への影響を遮蔽しようとしていることを、他の乗客に向けて「わざと」非言語的に周囲にアピールするのである。

2.3 「街中」、「食事・買物時」

近年では、「街中」、「食事・買物時（できる場所）」などの公共的な場所の多くで、ケータイ通話やパケット送受信が可能となっている。ケータイには、外出先でその場に居ない人と連絡をとったり、Webの情報をやりとりする機能が備わっていることから、「街中」、「食事・買物時」などの公共的な場所で使用頻度が多いことに驚きはない。

ただし、これらの場所がもたらす環境は様々であり、時間帯はもちろんのこと、周囲に居合わせる人の有無、その人々の行動や外見によっても異なる。不審そうな人物、酔っぱらい、奇抜な服装の人が出没しやすいとされる場所、一人では出向きにくいと言われる場所も公共空間には存在する。また、「自宅」や「会社・学校」近辺の路上は、頻繁にファミリー・ストレンジャー⁽⁴⁾に遭遇する場所でもある。都市生活者にとって、ファミリー・ストレンジャーと如何に接していくかは、重要なコミュニケーションの問題であり、彼らとの接触頻度の高い場所は、同じ公共空間といえども他の場所とは明らかに各自の社会的意味は異なる。同じ場所でも、居合わせる個人々によって、その場所がもたらす影響には違いがあるだろう。

我々は、公共的な場所の多様さをふまえた上で、ケータイを使用する行為を考察する必要がある。とりわけ、歩きながらすれ違うような短い時間間隔で不特定の他人と居合わせる場合と違って、座席に座っての食事中、行列に並んで待っている最中、

あるいは電車やエレベータに乗り合わせた時のように比較的長い時間、特定の他人と居合わせる場合がある。このような場合では、咳払いのようなささいな行動でさえも、空間を共にする者への働きかけと受け取られる可能性があり、身体的な行動には相応の注意が必要となっている^[11]。ケータイ使用に関しては、通話は明らかなマナー違反となるが、メール使用、コンテンツ利用などは、比較的静かに行われるため、あまり問題視されることはない。しかし、この行為が咳払いなどと同様に、空間を共有する者のある種のメッセージと捉えられる可能性がある。我々がケータイを使用することを考察する際には、これらの作用やその意味も併せて取り上げる必要がある。

3. ディスプレイを見る場面

3.1 共在状態・場面・状況

以下にケーススタディを述べるが、その前に用いる用語を整理する。富田は、メディア・コミュニケーションの理解の指標として、親密性と匿名性という2つの概念を軸に、人間関係を「まったくの他人」「インティメント・ストレンジャー」「顔見知り」「友人・恋人」の4つに分類している^[12]。このうち、「インティメント・ストレンジャー」は通話やメール利用に大きく関連するものの、現実空間で相対することが極めて少ないと考えられるため、この調査での分類から除外する。現実空間では、大きく分けて、これら「まったくの他人」「顔見知り」「友人・恋人」の3種類の人々と空間を共にする。これら3つの関係に関して、中間的、派生的、複合的な関係の有り様は往々に存在するが、この調査では、他者と空間を共にする場合を大きく分類するため、大きく分類できる典型的な関係性にのみ注目する。ただし、ここでの調査では、同じ空間に居合わせる「まったくの他人」をさらに2つに分けて「不特定のまったくの他人」と「特定のまったくの他人」に分ける。2.3節でも述べたように、現実空間では、近くに居る特定の何者かを意識した行動を取る場合と、不特定の何者かに向けられる行動は明らかに異なるからである。さらに、現実空間で周りに誰もいない状態として「自室でひとり」を追加する。この状態は、現実空間で他人とのリアルタイムのやりとりが全くないという状態であり、他の関係性との比較のために必要である。また、「友人・恋人」については、親しい人間関係と考えられるため、家族を追加して、「友人・恋人・家族」という分類項目に変更する。以上より、現実空間でのリアルタイムでの人間関係について、「自室でひとり」「不特定のまったくの他人」「特定のまったくの他人」「顔見知り」「友人・恋人・家族」の5つに分類する。これらを分類の便宜上、本稿では「共在状態」と呼称する。

また、各「共在状態」を記述するための用語も整理しておく。2章で用いた「場所」とは、ある空間的な区画内を指しており、人が居合わせる空間を地理的に捉えている。「場面」とは、ある場所を背景として、人々が居合わせている空間を視覚的に指している。その空間に居合わせる人々はもちろんのこと、空間内の物、空間内の人の見かけ、性別、服装、人同士の関係なども記述の対象として含まれる。「状況」は、置かれた「場

面」に応じて、空間内の当該者が、どんな影響を受け、どのように考えるかなどを推測したり解釈したりするための用語とする（例えば、電車内という「場所」において、向かいの席に知らない人が座るといふ「場面」では、お互いに顔をあげにくいような気まずい「状況」になる、という用法になる）。以降、「共在状態」で分類された人間関係について、ケータイを使用したくなるような典型的な「場面」例を挙げて、当該者にどのような心情や意図をもたらす「状況」だったのかを考察する。

3.2 ケーススタディ 1 - 場面の自由記述

ケータイを使用する行為は注意深く観察する必要がある反面、直接観察によって理解を全うするには自ずと限界がある。直接観察を行う観察者もまた現実空間に居合わせる一人の他人となるためである。同じ空間に居て観察しようとする態度そのものが、「観測問題」さながら、被観察者を刺激しかねない。よって、アンケート回答者を募り、自らの経験を述べてもらう方法での調査を行う必要がある。

第 1 回調査

時期：2005 年 7 月

対象：新潟大学生（主に 1 年生）73 人、18 歳から 21 歳まで、
男性 30 人、女性 43 人

第 2 回調査

時期：2006 年 7 月

対象：新潟大学生（主に 1 年生）55 人、18 歳から 20 歳まで、
男性 17 人、女性 38 人

2 回の調査で被験者に重複はない。第 1 回、第 2 回とも、被験者を一同に集めて集合的な説明を行った。回答はケータイを持つ者のみに求めた。1 週間、自分自身の行動に注意しておくように依頼した。その行動とは、着信音やバイブレーターによる呼び出しがないにも関わらず、自発的にケータイを取り出してディスプレイ画面を見る行動である。そのような行動をとった場合に、その場면을記憶しておくように指示した。そして、1 週間後に典型的な場面の例を 5 件程度、自由記述の形で記載して提出するように依頼した。1 件しか書かない回答者もいたが、最大で 8 件書いた回答者もいた。第 1 回で計 337 件、第 2 回で計 286 件の場面の記述を得た。

自由記述の回答は曖昧な表現が多く含まれる一方で、表現が短くて的確なことが多い。ここでは、得られた表現を元に、周囲に居ると推測される人間との典型的な関係、すなわち 5 つの共在状態によって分類する。さらに共在状態に分類された場面の例を元に、その状況における用法や意図を抽出する。

3.3 アンケート結果

アンケートで得られた回答を、上記 5 つの共在状態に分類した。回答の記述が詳細でなくても、文面から一般的な場面を推測できる場合には、上記の分類に当てはめていった。ただし、分類が困難になるような曖昧な表現は、分類不能と見なして考察より割愛した（例えば、「電車でひとりのとき」という回答

が述べられる場面は、ラッシュ時のぎゅうぎゅう詰めの車内に立って乗車している場合から、ガラガラの車内に一人で座っている場合まで様々な場面が考えられる）。

以下に 5 つの共在状態における典型的な場面例を 5 つずつ挙げる。いずれも、2 度の調査において、明瞭な表現で複数人から述べられた例である。（ただし、必ずしも多数の例ではない。一般性が高く理解しやすく、かつ幅広い使用例を挙げている。）以下の文面の多くは、得られた回答のままか、回答を抜粋したものだが、文意を損なわない程度に表現を変えたものもある。

共在状態 A：「自室でひとり」

- a. 部屋で時間（予定）を見る時
- b. ひとりでテレビを見ていて CM になった時
- c. 朝起きる時
- d. 部屋で一人で、何もすることがない時
- e. 勉強に行き詰った時

共在状態 B：「不特定のまったくの他人」

- a. 人を待っている時
- b. 満員電車での気まずさを回避したい時
- c. 人ごみに入る時
- d. 夜道を一人で歩いている時
- e. 一人でいる時、周りから「孤独な人」という印象を受けないようにしたい時

共在状態 C：「特定のまったくの他人」

- a. 路上ライブや路上ダンスをしている人達の前を通る時
- b. チラシやティッシュ配りを拒否したい時
- c. 不審者っぽい人が居る時
- d. 電車に乗って自分の前に人が座っている時
- e. 電車やバスで偶然一緒になった人と、降りてからも進行方向が一緒だった時

共在状態 D：「顔見知り」

- a. 顔だけ知っている人とすれちがう時
- b. キャンパス内などで話したくない人とすれ違う時
- c. 電車で昔の友人が近くにいる時
- d. 遠くから歩いてくる友達に気付き、近くに来て挨拶できる距離になるまでの間
- e. 仲の良い友達がいない講義室で、講義が始まるまで待っている時

共在状態 E：「友人・恋人・家族」

- a. 複数の友人といて話に入らなかった時
- b. 友達が携帯電話を使っている時
- c. 友達としゃべっていて沈黙になった時
- d. 好ましくない話題になった時
- e. 退屈さをアピールする時

3.4. 場面の考察

回答者の全員（次章も同様）が、2004-2006年に大学生である世代に属するが、彼（女）らはケータイ利用に関するリテラシー教育（本格的な提唱として^[13]）などは受けていない。彼（女）らは、謂わば「手探り」でケータイ使用を行ってきている。そのような者たちが述べた上記の典型的な例からでも、ケータイのディスプレイを見る行為は、各場面において様々な理由に応じて起きていることがわかる。各共有状態については、詳細に検討すべき課題である。しかし、ディスプレイを見るという行為そのものが、同時に空間を共有する者への働きかけにもなりうることを明らかにするのが本稿の狙いである。よって、以下では上記の報告例におけるケータイの役割と使用者の周囲への働きかけを指摘するに留める。

共有状態 A：「自室でひとり」では、現実空間で共に居合わせる者がいない。aのようなコミュニケーションのない使用法と、b, c, d, eのように自室外とのコミュニケーションの窓口としての使用法に分けられる。b, c, d, eの使用法では、自室にいたがリアルタイムに外部とコミュニケーションしようとする意図が現れている。

共有状態 B：「不特定のまったくの他人」では、知らない他人が存在する空間に居る場合である。その中の特定の誰かを意識した行動をとる必要はないが、不特定の他人の視線にさらされている自分を意識している状況である。aの例のように退屈のぎとして使用される場合もあるが、eの例では、一人で（alone）でいるが、孤独（lonely）ではないことを周囲にあえてアピールするための道具として使用されている。eの例は、その場にはいない親しい者と即座にコミュニケーション可能なツールならではの使用法であり、他の携帯可能な小物では、誰かと連絡中であるという印象を与えることはできない。ケータイのディスプレイを見るという行為そのものが、自身の印象操作を目論んで利用されている。

共有状態 C：「特定のまったくの他人」では、知らない他人が存在しており、かつ、そのうちの誰かとの「距離」や「関係」を調節する必要があるような状況である。a, b, cの場面のように、路上で自らに向けられつつある関わりに対して間接的に拒否するための使用法や、d, eの場面のように一定時間居合わせた他人に対して無関心であることを儀礼的にアピールするための使用法がある。都市空間においては、ホールの述べる個体距離（約 45cm-120cm 程度）や社会距離（約 1.2m-3.6m 程度）に一定時間、全くの他人が居合わせる場面が数多くある^[14]。それらの居合わせた人々に対して、会話を始めたり、交友関係を構築する準備がない場合には、後者の使用法は効果的であると推察できる。

共有状態 D：「顔見知り」では、明らかに知っている人間が近くにいることを認識しながら、なお、顔を合わせたり、コミュニケーションをとることに消極的であるような状況である。a, b, cの例では、話をしづらい、あるいは話をしたくない相手に対して「気がついていない自分」「他とのコミュニケーションで忙しい自分」を装って演出していると解釈できる。また、eのような例では、定期的に顔を合わせる者が視界内に居るこ

とを認識しながらも、それらの人たちは自分にとって親しみを感ずる存在ではないことを言外に述べてしまう使用法である。

共有状態 E：「友人・恋人・家族」では、親しい者と共にながら、リアルタイムでの交友状態は好ましくないような状況にある。ここで挙げた場面でケータイのディスプレイを見ようとする者は、顔を上げて目の前の親しい者とコミュニケーションを続けることが困難な状況にある。特にeの例では、現在進行中のコミュニケーションに耐えがたい心証を、周りの者に言外に訴えている。ケータイのディスプレイを見る行為が目の前の親しい者にとってどんな意味を持ち得るのかをある程度理解しながら、そのことを利用する使用法である。

5つの共有状態では、各、使用の仕方が異なる。共有状態 A：「自室でひとり」では、同じ空間を共有する者が居ないため、ケータイを用いて室外とのコミュニケーションをとろうとする意図がある場面がある。一方で、共有状態 B, C, D では、現実空間を共有する者とのコミュニケーションを間接的に拒絶したり、自らの態度をアピールする狙いで使用する場面があった。また、共有状態 E：「友人・恋人・家族」では、交友関係の状況を認識した上であえて使用している場面が多く、現実空間におけるリアルタイムの交友状態そのものを調節するためにケータイが利用されている場合があることを示している。つまり、共有状態 B, C, D, E の例が示すように、ケータイのディスプレイを見る行為には、現実空間への働きかけが含まれており、回答者たちはそのことを意図的に「わざと」利用していることがわかる。大学生が答えた例からだけでも、ケータイを介した Web の情報やその場にはいない者とのつながりが、現実空間での身体的演出の道具となりうるということがわかる。

また、共有状態 C の使用法に顕著に現れるように、目の前の人間との直接的なコミュニケーションの始まりを避ける⁽⁵⁾ ためにケータイを使用する場面がある。この使用法について、上述の岡部・伊藤^[10] が適用した解釈と別の観点から関与シールド概念を応用することができるだろう。つまり、ケータイそのものが目の前の人間とのコミュニケーションを遮る関与シールドである、という解釈である。これについては、紙幅の都合から別稿で議論する。

4. 空間的、身体的要因と意図的使用

4.1 ケーススタディ 2 - ケータイ使用の欲求の強さ

前章のアンケートの共有状態 B, C, D, E においては、ケータイのディスプレイを見る行為には、同じ空間に居合わせた者に対する働きかけが含まれる使用法が見られた。しかし、共有状態 B, C, D, E では明らかに置かれている場所や場面が異なるため、ケータイのディスプレイをつい見たくくなるような欲求がどのような要因に影響されやすいのかが上記の分類では明瞭でない。コミュニケーションの始まりを拒絶する相手、あるいは自己演出を見せつける相手との空間的位置関係や身体のリケーションなどによっても、その必要性は左右されると考えられる。よって、ケータイのディスプレイを見るという行為を如何に感じているか、ケータイのディスプレイを見たくなる欲求

を如何に感じるかを量的な指標で捉えるケーススタディを行った。

4.2 アンケート1—ケータイを使用する行為への印象

時期：2004年12月

対象：新潟大学生（院生を含む）98人（18歳から25歳まで、男性45人、女性53人）。前章回答者との重複はない。

被験者を集めて集合的な説明を行った。回答はケータイを持つ者に限定した。以下の2つの質問に2件式の回答（はい・いいえ）で答えさせた。

Q1：知人に気づかないフリをするためや他人との関わりを避けるためにケータイを使用することがあるか？

Q2：ケータイを使用している人は話しかけにくいと感じたことがあるか？

98人の回答すべてが有効であった。結果はQ1をはいと答えたものの割合が約86%（男性73%、女性96%）、Q2をはいと答えた者の割合が94%（男性89%、女性98%）であった。

4.3 アンケート2—場面別による5点尺度回答

時期と対象は4.2のアンケート1と同じである。回答者自身が質問文にあるような場面に置かれた時に、ケータイをどのくらいの頻度で使用したか、また場面の経験が無い場合は、その状況に置かれた時に、自分ならばどのくらい強くケータイを使用したいと思うかを答えさせた。質問文は平均的な学生・若い労働者などが休日に繁華街に出かけていく際に出会う場面を想定している。

Q1：一人で電車で座っていると、前の座席にカップルが座る場面

Q2：一人で電車で座っていると、お年寄りが近くに立ったので座席を譲るか迷う場面

Q3：一人で電車で座っていると、不審者らしき人物がこちらを見つめている場面

Q4：一人でラーメン屋に入ると、知らない人とテーブル席で相席にされた場面

Q5：一人でウィンドウショッピング中に、店員が接客に近づいて来る場面

Q6：友達との待ち合わせ場所で、ナンパ目的らしき人が接近してくる場面

Q7：友達との待ち合わせ場所で、近くで怖い人たちが小競り合いを始めた場面

Q8：友人との会話中に、友人のケータイに着信があり、友人が話を始めた場面

Q9：混んでいる映画館で行列に並んでいて、友人がトイレに行き、少しの間、行列中で一人にされた場面

Q10：一人で帰宅中、付き合いのない顔見知りはこちらに向かって歩いてくる場面

回答のための制限時間は設けなかった。回答は「必ず使う」から「使わない」までの間を5段階に分けて選択的に答えさせた。「必ず使う」を5点、「使わない」を1点として、中間の選択肢にそれぞれ、4,3,2点の重みを付けて、全設問について得点を計量した。98人の回答すべてが有効であった。図1では、全回答の結果を平均得点の高い順にソートして表示している。

また、全設問について、男女別の平均得点の差をマン・ホイットニーのU検定で検証した。図2に男女別の平均値を示す。棄却率0.05で平均値の差を比較した結果、Q3：電車内で不審者（ $p \sim 0.049$ ）とQ6：ナンパ者接近（ $p \sim 0.001$ ）の2つの設問だけに有意差が確認できた。

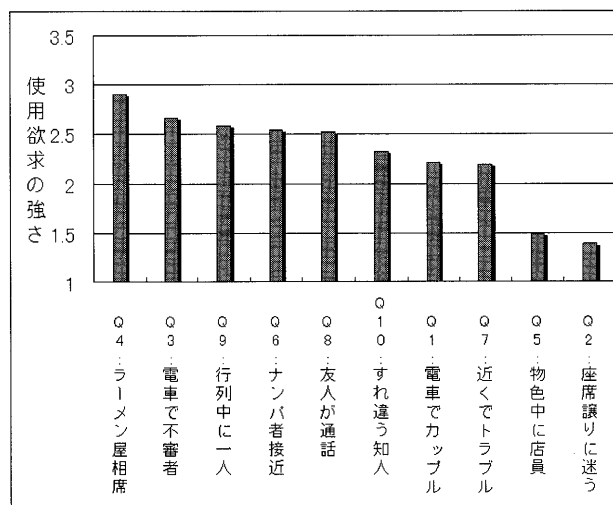


図1：場面別でのケータイ使用欲求の強さ

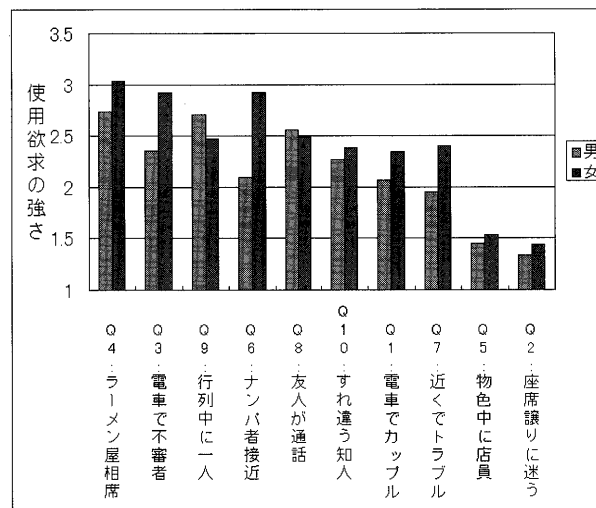


図2：場面別でのケータイ使用欲求の強さ（男女別）

4.4 距離・視線・性差

アンケート1では、周囲との関わりやコミュニケーションの開始を拒否するためにケータイを自覚的に使用する人の割合と、ケータイ使用中の人に話しかけにくいと感じる人の割合を調査した。この結果、両質問とも多くの人が「はい」という回答を示した。このことは、多くの人が、ケータイ使用中の人は話しかけにくいことを感じながらも、自分自身はそのことを

自覚的に利用することがあることを示している。アンケート2では、ケータイを使用したくなる欲求を場面ごとにどう感じるかが問題となる。ここでは、居合わせた他人との距離、視線、性差の3つの要素からこれらの場面を考察しよう^[15]。

ゴフマンは同じ視界内に人々が居合わせるとき、お互いの身体が、その意図の有無に関わらず、様々な情報のやりとりを行っていることを指摘した^[11]。その上で、同じ空間内に居合わせる人と人との間において、それら様々な身体的情報を含んだ総合的なやりとりを対面的相互作用と呼んだ。私たちの誰もが、一人で居る空間から一歩外に出れば、望む望まないに関わらず、何らかのメッセージを発信している。目のやり場はもちろん、ちょっとした仕草や身体の動きも、空間を共にする者の判断次第で様々な解釈される。他人と空間を共有する限り、身体を持つ我々はこのような情報発信と（誤解を含み得る）相互解釈が連鎖する対面的相互作用を行い続ける。ケータイのディスプレイを見るという行為も、この対面的相互作用の観点で捉える必要がある。

この対面的相互作用の概念は、挨拶行動の分析やパーソナルスペース理論などの非言語コミュニケーション理論に応用されている。挨拶行動の分析では、パーティの席上での出席者の視線のやりとりから会話に至るまでの儀礼的行動が上げられ、会話に至るまでの視線の使い方がその後のやりとりや出席者同士の関係に大きな影響を与えるとされる^[16]。パーソナルスペース理論では、同じ空間に居合わせる者同士の距離と行動との相関が指摘され、我々が常に他人との距離に鋭敏であることが裏付けられる^[14]。また、ジェンダー理論では、雑踏の中で安易に声をかけられてしまう女性の社会的立場の弱さが指摘される。公共空間に居る女性は、まさに「公共」の場に居るにも関わらず、いつ訪れるとも知れない不快感に備え、トラブルの芽と戦い続ける必要があることが述べられる^[17]。以上より、公共空間においては、他者の視線、他者との距離、本人の性差、の少なくとも3つの要素が対面的相互作用に大きく影響していると考えられる。4.3のアンケート2の結果をこの3つの要素から分析する。

4.5 分析と考察

図1の結果では、ケータイを使用したくなる欲求が高い上位4つの設問は、Q4、Q3、Q9、Q6である。これらの設問が述べる場面とは、いずれも3章での共在状態C：「特定のまったくの他人」に含まれるものであり、他人が近くに居るか、他人の視線を受ける状態がしばらく持続する。特にQ4のような場面は、他者の視線を避けがたく、さらに、空間的距離も非常に近い状態がある程度の時間持続するため、ケータイを使用したくなる欲求が高くなる状況であると考えられる。一方で、Q1、Q7、Q5、Q2の設問が述べる場面では、欲求の度合いが相対的に低い。これらの場面は、比較的欲求の高いQ4、Q3、Q9、Q6と比べて、他人との空間的距離が遠く、徒歩でその空間から移動することが比較的容易である。つまり、ケータイを使用する以外でも、視線から逃れて他人との距離をとりやすい。また、Q8は前章での共在状態Eの場面例bと、Q10は共在状

態Dの場面例aと同様の場面であり、ケータイを使用したくなる欲求を感じやすい状況である。

また全設問について、男女別の平均値の差をマン・ホイットニーのU検定で検証した。図2に男女別の平均値を示す。棄却率0.05で平均値の差を比較した結果、Q3：電車内で不審者（ $p \sim 0.049$ ）とQ6：ナンパ者接近（ $p \sim 0.001$ ）の2つの設問だけに有意差が確認できた。この2つの状況とも女性が高い平均値であった。Q3、Q6とも公共空間における少し離れた他者の視線や干渉を避ける必要を感じる状況である。この結果は、公共空間において「見られる」存在である女性の弱い立場を反映している。他者の視線は男性とて軽視できるものではないが、一般に女性ほど深刻ではない。この結果は、公共空間に居る女性は他者の視線を介したトラブルに気を配る必要がある^[17]ことを示している。

アンケート1の結果から明らかなように、ケータイを使用する行為自体は、話しかけにくい状況を作り出し、直接的な会話のコミュニケーションの障害となりやすく、また回答者の多くはそのことを自覚している。アンケート2の結果から、回答者たちの多くが、公共空間において、他人との距離、他人からの視線、性差などを要因として、ケータイを使用したくなる欲求を持っていると推測できる。すなわち、ケータイを使用する者は、その行為が周囲の人間にどんな印象を与えるかを知りながら、自覚的に利用している。アンケート2で想定した場面は、いずれも学生や若い労働者たちが休日に出くわすような一般的なものであるが、それらの結果だけからでも、回答者達がケータイを自己演出の道具として使用する場合があることを示している。

5. おわりに

以上の調査から、ケータイのディスプレイを見る、という日常的によく目にする行為にも様々な用途があることが示される。特に3章で述べた共在状態B、C、D、Eにおいてなされた演出的印象操作は、ケータイのディスプレイを見るという行為そのものがもたらす周囲への効果を自覚的に利用する行為である。また、アンケート回答者達は、周囲に居合わせた他人との距離、他人からの視線、性差などを観察しながら、ケータイを使用していると考えられる。

これらの行為を考察する観点として「目に見える2重の秘匿性」という言葉を挙げておこう。ケータイのディスプレイを見るという行為は現実空間の周囲の者に対して秘匿的な部分を含む。周囲にいる者はディスプレイを見るという行為自体を観察することは出来ても、一般にその画面の内容までは見透かせず、ディスプレイを見る行為が行為者にどんな意味があるかまでは理解できない。ケータイ内部の記憶内容は様々なプライバシーを含むため、必要以上の詮索もできない。さらに、ケータイのディスプレイを見るという行為を観察するだけでは、使用者がやむを得ずリアルタイムに即応すべき内容に向かっているのか、用もないのにケータイを操作しているだけなのか、判断することは困難である。つまり、ディスプレイの内容につい

てリアルタイムの必然性についての2重の秘匿性がある。

「見る—見られる者同士に発する権力関係」については多くの論者が述べているが(例えば^[18])、概して、見る側が圧倒的に有利であり、見られる側は一方的に見る側に評価される不利な立場とされている。この権力関係の図式は様々な社会的場面に通じており、日常的な現実空間に居合わせる者同士にも適用可能である。ゴフマンも、公共空間の中での振る舞いにおいて、なにかの行為を行う側とそれを観察する側に分けた場合、観察する側が優位である傾向にあると述べる^[11]。公共の場では行為者の選択の余地が限られているため、観察者の推察は大きくは外れないからだ。しかし、ケータイのディスプレイを見る行為が持つ2重の秘匿性は、その推察を困難にする。この秘匿性は「見る・見られる者同士に発する権力関係」に対する防衛策に転用可能である。ケータイが時と場所を問わず、着信者の都合を配慮せず、暴力性のあるメディア^[19]として、着信者の行動を制約する可能性がある故に、ケータイを使用する被観察者は、他人に自らを伺わせることなく振る舞う「自由」を手に入れているのではないだろうか。

このような2重の秘匿性を盾にとつて、ケータイを持つ者はさりげなくケータイのディスプレイを見ることができ、ディスプレイを見る行為自体はあけすけだが、その内容もリアルタイムで操作する必然性も周囲に探らせない。3章の共在状態B, C, D, Eの例が示すように、アンケート回答者達はケータイのディスプレイを見るという行為そのものを、周囲の環境に照らして利用する場合があり、さらに周囲に様々なアピールをする場合もある。これらの結果と考察から、現代の私たちはケータイのディスプレイを見るという行為を、新しい身体言語、新しい非言語コミュニケーションとして理解していく必要があるだろう。ほとんどの人がケータイを持ち歩き、家庭内にさえ浸透してきている現在、人々は新しい文化を築きつつあるのではないだろうか。人々が交わす新しいコミュニケーションの様態の理解に向けて、注意深く取り組んで行くべきであると考えられる。

注

- (1) 「メール」はケータイを用いた電子メールを指す。以降同様。
- (2) 「コンテンツ」という表記は文献の原文通りである。文献の調査時期(2004年12月～2005年3月)を勘案するとWebページ、ゲームなどが主な利用内容であると推測できる。以降、本稿では「コンテンツ」はWebページ、ゲームなどを指す。
- (3) 「携帯電話」という表記は調査報告の原文のままである。
- (4) 顔は見たことがあるが、挨拶したことも話したこともない他人のことを指す。
- (5) ゴフマンは人々が為す相互作用を「焦点の定まらない相互作用」(たまたま居合わせた者同士がお互いの身体が発する情報収集を行いながらも、特定の協同的行為をとりおこなわない状況にある際のやりとりのこと、例えばせきばらい、盗み見、無言であること、

など)と「焦点の定まった相互作用」(人々が近接していて、互いに合図を交わしながら注意を単一の焦点に維持しようとはっきりと協力し合う場合のやりとりのこと、例えば会話を行うこと、ゲーム、チームプレーを行うことなど)の2つに区別した。さらにたまたま居合わせた者同士が「焦点の定まらない相互作用」から「焦点の定まった相互作用」へ移行して行うやりとりを「対面的かかわり」あるいは「出会い」と呼ぶ。ゴフマンは、人々が出会いを求めており、またそれを受け入れる必要がある一方で、出会いには用心深くある必要もあり、居合わせた者との接触を避けるべき努力が日常で多く行われていることを指摘している。(参考文献[11])

参考文献

- [1] 電気通信事業者協会 HP <http://www.tca.or.jp/japan/database/daisu/index.html>
- [2] 岡田美佐:「ケータイをめぐる言説」, 松田美佐, 岡部大介, 伊藤瑞子編, 『ケータイのある風景』北大路書房, pp.1-24, (2006).
- [3] モバイル社会研究所:『モバイル社会白書 2006』pp.220-227, (2006).
- [4] タークル, S.:「技術を本来の役割に」(前編), 未来心理, vol.001, pp.6-17, (2005).
- [5] モバイル社会研究所:『モバイル社会白書 2005』pp.16-39, (2005).
- [6] iMi リサーチバンク HP http://www.imi.ne.jp/blogs/research/2004/03/post_36.html
- [7] 平岡善浩・馬立歳久:「モバイル時代の「家族」と「住居」」, モバイル社会シンポジウム 2006 資料 http://www.moba-ken.jp/symposium2006/shiryo/hiraokamadachi_new.pdf
- [8] 見城武秀:「「他者がいる」状況下での電話」, 山崎敬一編, 『モバイルコミュニケーション』大修館書店, pp.145-164, (2006).
- [9] 富田英典:「都市空間とケータイ」, 岡田朋之, 松田美佐編, 『ケータイ学入門』有斐閣選書, pp.49-74, (2002).
- [10] 岡部大介, 伊藤瑞子:「ネゴシエーションの場としての電車内空間」, 松田美佐, 岡部大介, 伊藤瑞子編, 『ケータイのある風景』北大路書房, pp.167-180, (2006).
- [11] ゴフマン, E.:『集まりの構造』(丸木恵祐子, 本名信行訳) 誠信書房, pp.37-155, (1980).
- [12] 富田英典:「ケータイとインテリメンツ・ストレンジャー」, 松田美佐, 岡部大介, 伊藤瑞子編, 『ケータイのある風景』北大路書房, pp.140-163, (2006).
- [13] 下田博次:『ケータイ・リテラシー』NTT出版, (2004).
- [14] 渋谷昌三:『人と人との快適距離』日本放送出版協会, (1990).
- [15] 長井ひろみ:「対面的相互作用におけるケータイ使用としきりのメディア論」, 新潟大学人文科学研究科修士論文, (2005).
- [16] ケンドン, A., ファーバー, A., :「人間の挨拶行動」(佐藤和久訳), 菅原和孝, 野村雅一編『コミュニケーションとしての身体』大修館書店, pp.136-188, (1996).
- [17] 安川一:「〈共在〉というボルノグラフィ」安川一編『ゴフマン世界の再構成』世界思想社, pp.185-210, 1991.
- [18] フーコー, M.:『監獄の誕生』(田村 俣訳), 新潮社, 1977.
- [19] 吉見俊哉, 若林幹夫, 水越伸:『メディアとしての電話』, 弘文堂, pp.104-141, 1992.